

福島第一原子力発電所の 汚染水の状況と対策について

2018年5月22日

東京電力ホールディングス株式会社

1. 「汚染水対策」の3つの基本方針

■ 汚染水の対策については、3つの基本方針に基づき、予防的・重層的対策を進めています。

方針1. 汚染源を取り除く

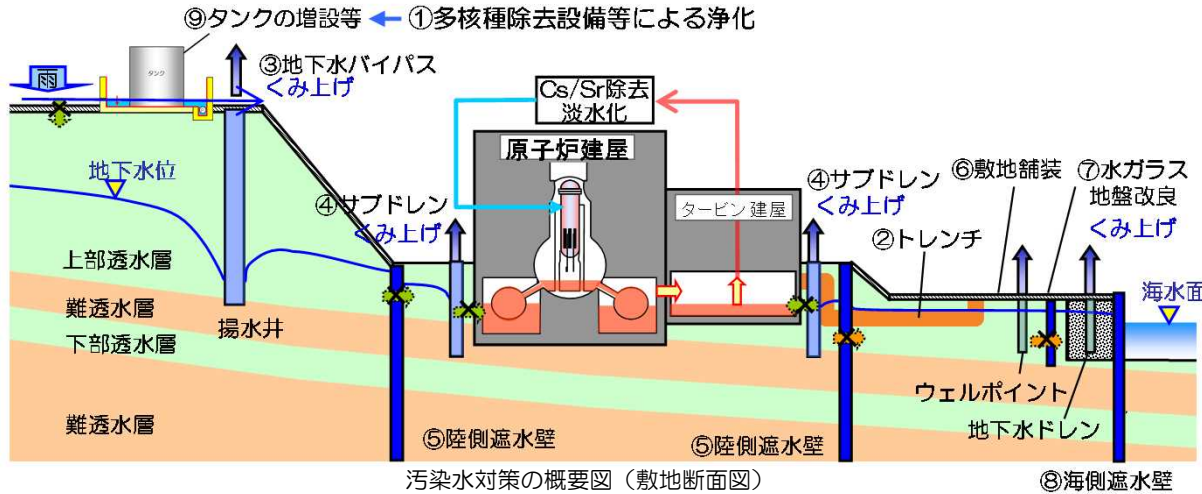
- ①多核種除去設備等による汚染水浄化
- ②トレンチ(※)内の汚染水除去
- (※) 配管などが入った地下トンネル

方針2. 汚染源に水を近づけない

- ③地下水バイパスによる地下水汲み上げ
- ④建屋近傍の井戸(サブドレン)での地下水汲み上げ
- ⑤凍土方式の陸側遮水壁の設置
- ⑥雨水の土壤浸透を抑える敷地舗装

方針3. 汚染水を漏らさない

- ⑦水ガラスによる地盤改良
- ⑧海側遮水壁の設置
- ⑨タンクの増設
- (溶接型へのリプレース等)



汚染水対策の概要図(敷地断面図)



汚染水対策の概要図(敷地平面図)

対策内容	2013年度		2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
	上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期
①多核種除去設備等による汚染水浄化						2015年5月27日 RO濃縮塩水処理完了					現在	
②トレンチ内の汚染水除去						2015年12月11日 全汚染水除去処理完了						
③地下水バイパスによる地下水汲み上げ												
④建屋近傍の井戸(サブドレン)での地下水汲み上げ												
⑤凍土方式の陸側遮水壁の設置												
⑥雨水の土壤浸透を抑える敷地舗装												
⑦水ガラスによる地盤改良												
⑧海側遮水壁の設置												
⑨タンクの増設(溶接型への交換等)												

中長期ロードマップにおける汚染水対策のマイルストーン(主要な目標工程)

分野	旧版(2015年6月12日)			新版(2017年9月26日)	
	内容	時期	達成状況	内容	時期
取り除く	多核種除去設備等による再度の処理を進め、敷地境界の追加的な実効線量を1mSv/年まで低減完了	2015年度	達成(2016年3月)		
	多核種除去設備等で処理した水の長期的取扱いの決定に向けた準備の開始	2016年度上半期	達成(2016年9月)		
近づけない	建屋流入量を100m ³ /日未満に抑制	2016年度	概ね達成(2017年3月)	汚染水発生量を150m ³ /日程度に抑制	2020年内
漏らさない	高濃度汚染水を処理した水の貯水は全て溶接型タンクで実施	2016年度早期	一部をフランジ型タンクで貯水	浄化設備等により浄化処理した水の貯水を全て溶接型タンクで実施	2018年度
滞留水処理完了	①いずれかのタービン建屋の循環注水ラインから切り離し	2015年度	達成(1号機)(2016年3月)	①1、2号機間及び3、4号機間の連通部の切り離し	2018年内
	②建屋内滞留水中の放射性物質の量を半減	2018年度	2017年6月時点で半減以下	②建屋内滞留水中の放射性物質の量を2014年度末の1/10程度まで減少	2018年度
	③建屋内滞留水の処理完了	2020年内	1号機タービン建屋内の床面露出(2017年3月)	③建屋内滞留水の処理完了	2020年内

2. 汚染源を「取り除く」対策の進捗状況

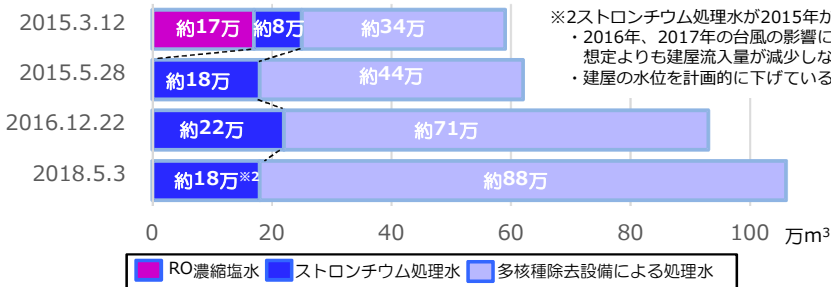
- 日々発生する建屋滞留水をセシウム吸着装置・多核種除去設備等で浄化することにより、リスク低減を図っています。
- セシウム吸着装置の処理水を直接建屋に移送するライン（滞留水浄化設備）を新設し、建屋滞留水中の放射能濃度をさらに低減させる循環浄化を開始しました。これにより、建屋滞留水の放射性物質濃度は、循環浄化しない場合と比較し、最大で4割程度低減出来ると評価※1しています。
- 引き続き、建屋滞留水処理を行い、順次建屋間を切り離し、最終的には建屋をドライアップすることを目指します。

※1：各建屋滞留水が混合されるプロセス主建屋、高温焼却炉建屋にて、滞留水中の放射能濃度（Cs-137とSr-90）を評価。

汚染水処理設備と貯蔵状況

- 2015年5月、貯蔵タンクの底に残る水を除いた、ストロンチウムを含む汚染水（RO濃縮塩水）の浄化処理を完了しました。
- 現在、セシウムとストロンチウムを浄化したストロンチウム処理水を、更に多核種除去設備により浄化処理してリスクの低減を図っています。

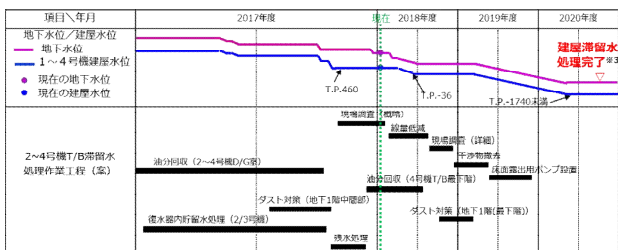
汚染水処理設備	多核種除去設備 (ALPS)	増設多核種除去設備 (ALPS)	高性能多核種除去設備 (ALPS)	セシウム吸着装置 (KURION)	第二セシウム吸着装置 (SARRY)
除去能力	62核種（トリチウムを除く）を告示濃度限度未満			ストロンチウム (Sr) を1/100~1/1,000	
処理能力	250m ³ /日 ×3系統	250m ³ /日 ×3系統	500m ³ /日	600m ³ /日	1,200m ³ /日



<2-1. 汚染水処理設備と貯蔵状況>

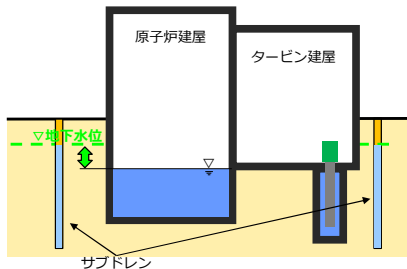
建屋内滞留水処理に向けた取り組み状況

- 建屋滞留水の水位を、地下水水位（サブドレン水位）より低く管理することで、建屋滞留水の建屋外への漏えいを防止しています。
- サブドレン水位とともに建屋滞留水水位の低下を計画通りに進めていきます。

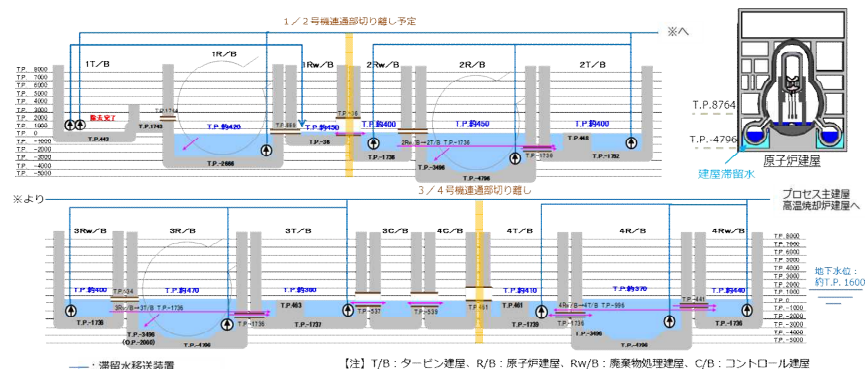


※3 循環注水を行っている1~3号機原子炉建屋以外の建屋の最下階床面露出。

<2-2. 今後の水位低下計画>



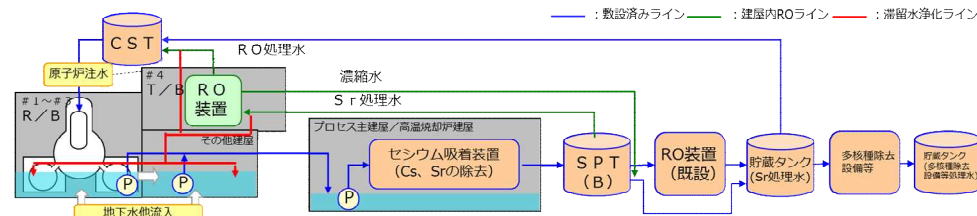
<2-3. 1号建屋滞留水と地下水位の管理 (イメージ)>



<2-4. 連通部切り離し (イメージ)>

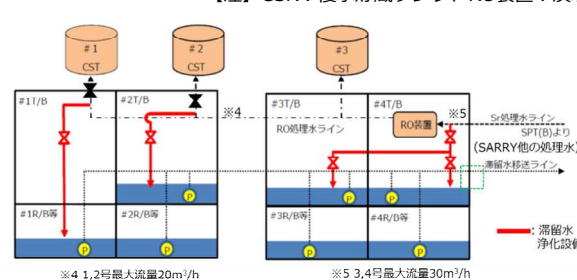
建屋滞留水中の放射性物質の濃度低減

- 建屋滞留水中の放射性物質の低減を加速させるため、2018年2月22日に3、4号機側で、2018年4月11日に1、2号機側で建屋滞留水の循環浄化を開始しました。
- 循環浄化では、水処理装置出口ラインから分岐する配管を新たに設置し、汚染水処理装置で浄化した処理水を、1号機原子炉建屋及び2~4号機タービン建屋へ移送します。



<2-5. 1~4号機滞留水浄化設備概要>

【注】 CSR：復水貯蔵タンク、RO装置：淡水化装置（逆浸透膜装置）



<2-6. 1~4号機滞留水浄化設備構成>



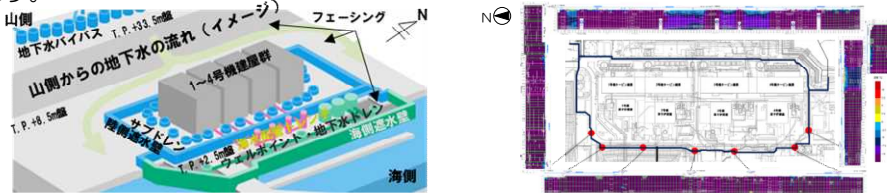
<2-7. 4号機滞留水浄化配管>

3. 汚染源に水を「近づけない」対策の進捗状況（1 / 2）

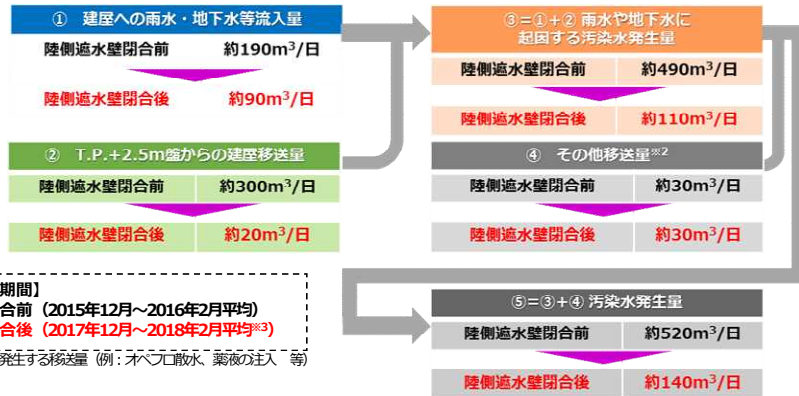
- 陸側遮水壁やサブドレン・フェーシング等との重層的な汚染水対策により、地下水位を安定的に制御し、建屋に地下水を近づけない水位管理システムが構築されたと考えています。また、2018年3月7日に開催された汚染水処理対策委員会において、陸側遮水壁による地下水の遮水効果が明確に認められ、汚染水の発生を大幅に抑制することが可能となったとの評価が得られました。
- しかしながら、2017年10月に発生した台風襲来時の影響と2018年2月に実施したK排水路補修作業の影響により、一時的な建屋流入量増加が確認されたことから、特定した増加要因に対して、必要な対策を実施していきます。また、他の要因の有無についても調査を継続し、必要な箇所について対策を実施していきます。
- 今後、建屋滞留水処理やサブドレン水位低下などの重層的な対策に継続して取り組むとともに、建屋の屋根損傷部からの雨水流入を抑制する雨水対策や、埋設構造物等を介して建屋へ流入する経路の調査・対策を進め、汚染水発生量の更なる低減に向けて取り組みます。

重層的な汚染水対策による効果

- 陸側遮水壁の閉合に伴い、山側からの地下水は陸側遮水壁によって遮水され建屋周辺を迂回しており、「雨水・地下水に起因する汚染水発生量」は、閉合前490m³/日でしたが、閉合後110m³/日となり、1/4程度まで低減しています。
- また、廃炉作業に伴い発生する移送量を含めた汚染水発生量は140m³/日であり、湯水期ではありませんでしたが、平均降雨における2020年内の目標としている150m³/日を下回っています。

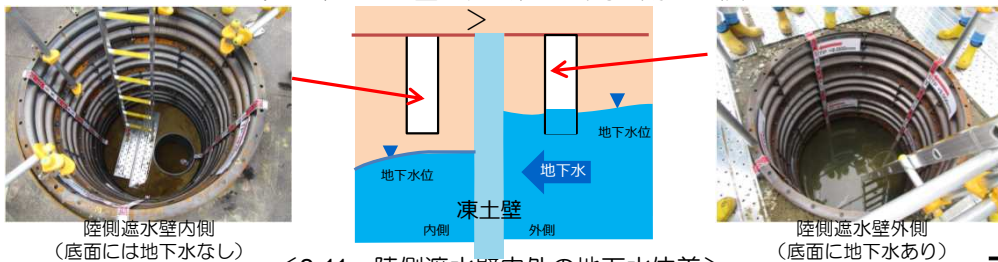


<2-8. 重層的な汚染水対策の効果 (イメージ) > <2-9. 陸側遮水壁の凍結状況 >



【比較データ期間】
 陸側遮水壁閉合前 (2015年12月~2016年2月平均)
 陸側遮水壁閉合後 (2017年12月~2018年2月平均※3)
 ※2: 廃炉作業に伴い発生する移送量 (例: ホットドラム水、薬液の注入等)
 ※3: ~22日

<2-10. 汚染水発生量の低減状況 (湯水期の比較) >



<2-11. 陸側遮水壁内外の地下水位差 >

一時的な建屋流入量増加の要因と対策

- 2017年10月 (台風襲来時)

<要因>

- ① 1, 2号機タービン建屋の屋根雨水排水のトレンチを介した建屋流入
- ② 3号機タービン建屋上屋の屋根損傷部からの雨水流入量増加

<対策>

- ① 2号機取水電源ケーブルトレンチ建屋貫通箇所の調査を実施し、その結果を踏まえ必要な対策を実施します (~2018年8月予定)。
- ② 3号機タービン建屋上屋について、屋根からの雨水流入防止対策を実施します (~2020年上期予定)。

- 2018年2月 (降雨なし)

<要因>

補修作業に伴うK排水路の水の一部が、既存の雨水排水システムを逆流。

<対策>

K排水路について、逆流防止対策を検討し、設計・施工方法が固まり次第、対策を実施します (~2018年6月予定)。

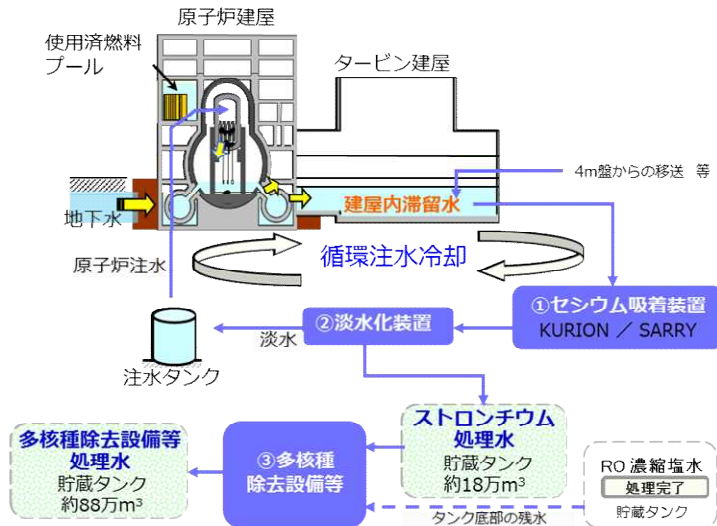


<2-12. 2017年10月台風時の増加要因 > <2-13. 2018年2月 (降雨なし) の増加要因 >

4. 汚染水を「漏らさない」対策の進捗状況

- 日々発生する汚染水は、放射性物質の濃度を低減し、タンクに貯蔵しています。
- 汚染水の受入容量が不足しないよう、計画に余裕をもって鋼製円筒型タンク（溶接型タンク）の建設を順次実施しています。
- タンクの信頼性向上のため、フランジ型タンク（鋼材をボルト締めしたタンク）から溶接型タンクへのリプレース（撤去および設置）を実施しています。
- フランジ型タンクの解体時には、ダストが外部に飛散することのないよう、ダスト飛散抑制対策※1及びダスト測定※2を確実に実施しています。
- 運用中のフランジ型タンクについては、パトロールの監視強化等を継続して、漏えいに対する予防保全対策を実施する等、適切に対応してまいります。

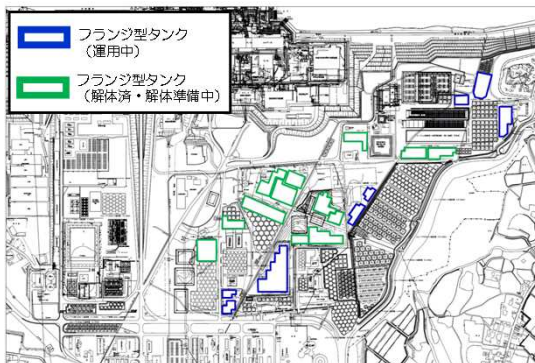
浄化処理した水の貯水



<2-17. 汚染水処理の流れ>

フランジ型タンクの運用状況

- フランジ型タンクについては、順次解体し、現在運用中のタンクは103基となっています。運用状況の詳細は、以下のとおり。



<2-18. フランジ型タンク運用エリア>

【フランジ型タンクの使用状況】
(2018年5月10日時点)

- ・フランジ型タンク基数（運用中エリア） 103基
- ・フランジ型タンク（解体・解体準備中エリア） 231基

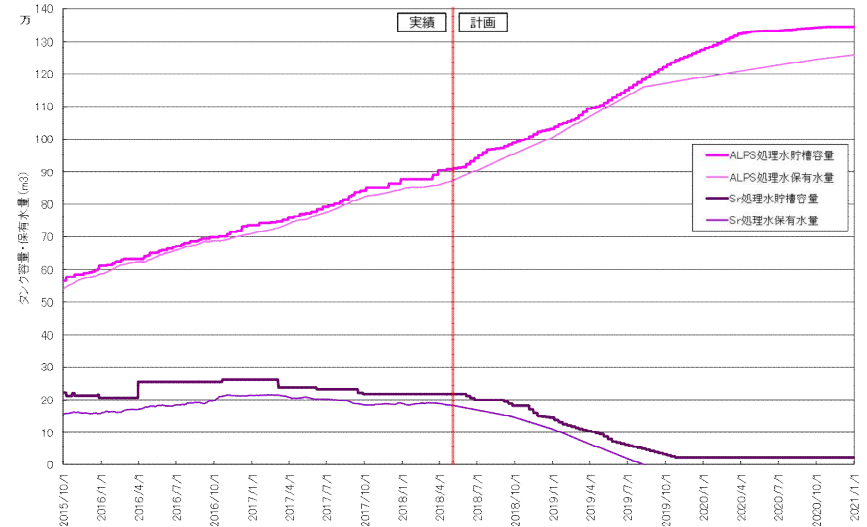
（参考）1-4号機タンク基数 864基



溶接型タンク フランジ型タンク

タンクリプレースについて

- タンク建設は、フランジ型タンクを溶接型にリプレースすることで、信頼性向上による汚染水リスクの低減、配置効率の改善や大型化による容量増加を見込めます。
- 1～4号機建屋滞留水の処理水を貯蔵しているフランジ型タンクについては、ストロンチウム処理水※3を先行して処理し、2018年度中には全ての処理水が溶接型タンクに貯蔵される予定です※4。
- 運用停止したフランジ型タンクは、汚染水の受入容量が不足しないよう、計画に余裕をもって解体し、溶接型タンクへのリプレースを順次実施していきます。
- なお、その他構内で運用中のフランジ型タンク※5は、パトロールや水位監視（常時監視）等を継続して、漏えいに対する予防保全対策を実施する等、適切に対応してまいります。



<2-19. 水バランスシミュレーション>

※1 【ダスト飛散抑制対策】

- ✓ 解体前にタンク内面に散水
- ✓ 解体前に、タンク内面への塗装を実施
- ✓ 解体中も連続的に、局所排風機によるダスト回収を実施
- ✓ 作業終了時は仮設屋根を設置

※2 【ダスト測定結果】

- ✓ 2017年11月までに解体したタンクにおいて作業管理基準値を超過する状況はなかった。
- ✓ 作業管理基準は、マスク（全面、半面マスク）着用基準の1/4の値であり、十分低い値。

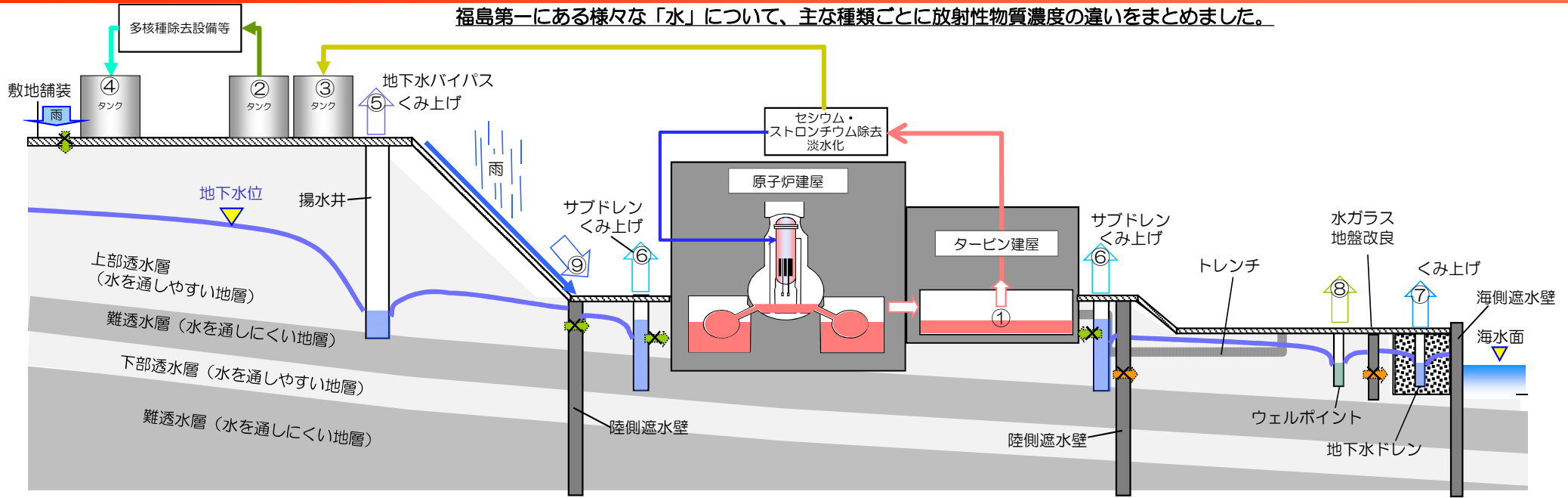
※3 多核種除去設備（ALPS）での浄化処理前に、セシウムおよびストロンチウムの濃度を一定程度先行して低減した水。

※4 中長期ロードマップにおける主要な目標工程。

※5 5、6号滞留水処理水や汚染水タンクエリアの堰内に溜まった雨水等を貯留するタンク。

(参考) 地下水・雨水・建屋滞留水等の汚染水・処理水などの水質の違い

福島第一にある様々な「水」について、主な種類ごとに放射性物質濃度の違いをまとめました。



福島第一の主な水の種類		濃度のイメージ (濃さの程度) バケル/リットル				どのような水なのか	
		セシウム134	セシウム137	全ベータ線核種	トリチウム		
	①建屋滞留水 2017年3月 1号T/B除去完了	数10万～ 数100万	数100万～ 数1,000万	数100万～ 数1,000万	～数100万	燃料によって汚染された冷却水と、建屋に流入した地下水が混じり合った水	
タンク	②濃縮塩水 2015年5月27日 処理完了	～数万	～数万	～数億	～数100万	建屋滞留水からセシウム除去装置によってセシウムを除去した水(津波・海水注入による塩分を含む)	
	③ストロンチウム処理水等	～数1,000	～数1,000	～数100万	～数100万	濃縮塩水からストロンチウム除去装置によりストロンチウムを除去した水	
	④多核種除去設備(ALPS)等処理水(代表)	～数10	～数10	～数100	～数100万	濃縮塩水やストロンチウム処理水から多核種除去設備によりトリチウムを除く殆どの放射性物質を除去した水	
地下水	⑤地下水パイパス	0.01以下	0.01以下	1以下	数100	建屋に流入する地下水を減らすため、敷地の山側からくみ上げた地下水	
	⑥サブドレン	処理前	ND～数100	ND～数1,000	ND～数1,000	建屋に流入する地下水を減らすため、建屋近傍からくみ上げた地下水(「ND」は、検出限界未満を示す。)	
		処理後	ND	ND	ND		1,500未満を確認
	⑦地下水ドレン	処理前	ND～数10	ND～数100	数10～数1,000	数100～数1,000	海側遮水壁によって堰き止められた地下水を海側遮水壁の陸側からくみ上げた水(「ND」は、検出限界未満を示す。)
		処理後	ND	ND	ND	1,500未満を確認	
⑧ウェルポイント水	～数100	～数1,000	～数100万	～数100万	発災当時に流出した汚染水の影響により現在も汚染レベルの高い地下水(流出防止対策を講じポンプにより建屋に回収中)		
雨水	⑨排水路水(K排水路)	～数100	～数100	～数1,000	～数100	敷地内に降った雨水やしみ出す地下水を排水するために設けられた排水路を流れている水	
(参考) 告示濃度限度		60	90	30 ストロンチウム90	6万	(意味合い) 核種ごとに告示濃度の水を毎日約2リットル飲み続けた場合、年間被ばく量が約1ミリシーベルトとなる	

(参考) 汚染水の状況と対策に関する進捗状況のまとめ (1 / 2)

□ : 対策完了済

		現在の進捗状況	今後の予定	想定されるリスク・課題						
方針1 取り除く	多核種除去設備による汚染水浄化	<p>RO濃縮塩水※1の処理は、タンク底部の残水を除き、2015年5月27日に完了 これまでに多核種除去設備（ALPS）などにより約91万m³※2を処理 (2018年5月10日時点)</p> <p>※1 RO濃縮塩水：処理装置等（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置等）により主要核種のセシウムが除去された廃水のこと ※2 既設・増設多核種除去設備処理水の一部は、残水があるRO濃縮塩水タンクに移送し、Sr処理水等として貯蔵</p> <table border="1"> <tr> <td>既設</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 既設多核種除去設備：運転中（HOT試験） 約37万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約37万m³/2018年1月18日時点) </td> </tr> <tr> <td>高性能</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 高性能多核種除去設備：運転中（HOT試験） 約10万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約10万m³/2018年1月18日時点) </td> </tr> <tr> <td>増設</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 増設多核種除去設備：運転中 約43万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約41万m³/2018年1月18日時点) 本格運転に向けた実施計画が認可 (2017年1月23日) </td> </tr> </table>	既設	<ul style="list-style-type: none"> 既設多核種除去設備：運転中（HOT試験） 約37万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約37万m³/2018年1月18日時点) 	高性能	<ul style="list-style-type: none"> 高性能多核種除去設備：運転中（HOT試験） 約10万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約10万m³/2018年1月18日時点) 	増設	<ul style="list-style-type: none"> 増設多核種除去設備：運転中 約43万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約41万m³/2018年1月18日時点) 本格運転に向けた実施計画が認可 (2017年1月23日) 	<ul style="list-style-type: none"> タンク底部に残る残水は、タンク解体時に順次処理を実施 たまり水が確認されたHIC※3に対して、蓋解放調査等の結果から恒久対策を検討 <p>※3 HIC (High Integrity Container/高性能容器)：多核種除去設備や吸着塔で発生する、沈殿物生成物（スラリー）や使用済吸着材を保管する容器</p>	<p>課題：HIC内部で発生した水素ガスにより、HIC内容物の液位が上昇し、水が外部へ漏えい →2015年4月2日のHIC蓋外周部でのたまり水発見を受け、保管されている各HICの点検の優先順位付けを実施し、点検中</p> <ul style="list-style-type: none"> 第二保管施設 (2018年5月10日時点：保管HIC670基) 1巡目の点検が2015年6月に完了し、30基でたまり水が確認された 2巡目の点検が2015年9月に完了し、新たに4基でたまり水が確認された 3巡目以降、新たなたまり水発生はなく、10巡目の点検が1月18日に完了 今後は、優先度の高いHICについて点検を実施していく 第三保管施設 (2018年5月10日時点：保管HIC2,066基) これまでに2基で溜まり水が確認された 点検継続中 <p>→HIC内の液位上昇は継続的に発生することから、蓋からの漏えい防止のため上澄み水の抜き取りを実施中</p>
	既設	<ul style="list-style-type: none"> 既設多核種除去設備：運転中（HOT試験） 約37万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約37万m³/2018年1月18日時点) 								
	高性能	<ul style="list-style-type: none"> 高性能多核種除去設備：運転中（HOT試験） 約10万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約10万m³/2018年1月18日時点) 								
	増設	<ul style="list-style-type: none"> 増設多核種除去設備：運転中 約43万m³の処理完了 (2018年5月10日時点) (前回報告時：約41万m³/2018年1月18日時点) 本格運転に向けた実施計画が認可 (2017年1月23日) 								
トレンチ内の汚染水除去	海水配管トレンチ内の汚染水（約11,000m ³ ）は、2015年12月11日に移送完了 トレンチの閉塞充填は12月21日に完了	なし	なし							
建屋滞留水処理	<ul style="list-style-type: none"> 1号機復水器内滞留水についてH/W天板上部までの水抜・希釈および天板下部の水抜きを完了 (2017年8月4日) 2号機復水器内滞留水についてH/W天板上部までの水抜および天板下部の水抜きを完了 (2017年11月17日) 3号機復水器内滞留水についてH/W天板上部までの水抜および天板下部の水抜きを完了 (2017年12月15日) 1号機タービン建屋内滞留水を除去 (2017年3月) 2～4号機T/B最下階中間部床面を露出 (2017年12月) 	<ul style="list-style-type: none"> 計画的に調査を実施し、残水が確認されたエリアについて、排水作業を実施 	<ul style="list-style-type: none"> 移送先放射能濃度の上昇による処理装置への影響 →安定的に移動できる範囲での滞留水の移送及び移送先放射能濃度推移の確認 							
方針2 近づけない	地下水パイパスによる地下水くみ上げ	<ul style="list-style-type: none"> 運転中(2014年5月下旬より汲み上げ・排水を開始) (排水実績：221回/377,441m³(前回報告時：206回/348,772m³) (2018年5月18日時点) 	<ul style="list-style-type: none"> 運用目標を遵守した運転の継続 	<p>リスク：揚水井の放射能濃度上昇 →濃度監視を適切に実施</p> <p>リスク：揚水ポンプへの鉄酸化細菌等の付着による、汲み上げ流量低下 →内部観察結果に応じ清掃等を適宜実施</p>						
	建屋近傍の井戸での地下水くみ上げ(サブドレン)	<ul style="list-style-type: none"> 関係者のご了解を経て、2015年9月3日よりサブドレンのくみ上げを開始 2015年9月14日より、排水を開始 (排水実績：702回/531,487m³(前回報告時：614回/488,199m³) (2018年5月17日時点) 浄化した地下水は水質が運用目標未満であることを東京電力及び第三者機関にて確認したうえで排水 	<ul style="list-style-type: none"> 運用目標を遵守した運転の継続 	<p>リスク：建屋周辺地下水の水位と建屋水位が逆転することによる建屋内汚染水の流出 →サブドレンは建屋水位に対して余裕を持った水位差を確保し、常時水位監視をしながら運転中</p> <p>ただし、2017年8月No.51水位低下事象、同年9月新設サブドレン水位設定誤りを引き起こしたため、再発させないよう業務の総点検および再発防止対策を着実に実行する</p>						

(参考) 汚染水の状況と対策に関する進捗状況のまとめ (2/2)

□: 対策完了済

	現在の進捗状況	今後の予定	想定されるリスク・課題	
方針2 近づけない	凍土方式の陸側遮水壁の設置	<ul style="list-style-type: none"> 設置工事完了 (2014年6月上旬より工事開始、2015年11月9日完了) 「海側全面」、「北側一部」、「山側の部分先行凍結箇所」について2016年3月31日より凍結開始 (第一段階フェーズ1) 「未凍結箇所7箇所」を除く山側の残りの部位を凍結する第一段階フェーズ2を2016年6月6日より開始 山側の閉合範囲を95%に拡大 海側及び山側で温度の低下が遅れている箇所については、海側を6月6日より、山側を8月10日より凍結促進のため補助工法を実施 海側について、10月までに海水配管トレンチ下の非凍結箇所や地下水位以上の範囲等を除いた範囲が全て0℃を下回る 第二段階として、2016年12月3日から未凍結箇所7箇所中2箇所、2017年3月3日から4箇所の凍結を開始 未凍結箇所1箇所については、2017年8月15日に実施計画の変更認可を受け、2017年8月22日より凍結を開始 2018年3月、陸側遮水壁はほぼ全ての範囲で地中温度が0℃を下回ると共に、山側では4~5mの内外水位差が形成され、深部の一部を除き完成。 	<ul style="list-style-type: none"> 温度の低下が遅れている箇所については、引き続き補助工法を実施し、凍結状況、陸側遮水壁内外地下水位差、護岸エリア (T.P.2.5m盤) への地下水流入量等の確認を継続 	<p>リスク：陸側遮水壁造成による周辺地下水の水位が過度に低下することによる建屋内汚染水の流出</p> <ul style="list-style-type: none"> →建屋周辺地下水位、建屋内水位の適切な監視及びサブドレン、建屋内滞留水移送ポンプ等の運転による流出防止 →周辺地下水位の過度な低下に備え、サブドレンの停止、建屋周辺への注水、冷凍機の停止 (凍土の解凍) 等の水位回復策を準備 →建屋周辺への注水について、注水効果を確認するための試験を実施し、適切に注水できることを確認 <p>リスク：地盤が十分に凍結せず、効果が発現しない</p> <ul style="list-style-type: none"> →フィーシビリティ・スタディにおいて以下の通り確認 ・地下水流速等のパラメータを考慮し適切な凍結管の間隔を選定 ・現地地盤における小規模遮水壁実証試験において、設定した凍結管間隔で地盤が凍結することを確認 →地下水流速が速く凍結しにくい場合には、補助工法を実施し、流速を低減させ、凍結を促進させる
	雨水の土壌浸透を抑える敷地舗装	<ul style="list-style-type: none"> 建屋エリア、他工事干渉箇所を除く計画エリアの100%施工完了 (2016年3月時点) 建屋エリアやその他エリアについて作業継続中 	<ul style="list-style-type: none"> 発電所敷地内のフェーシング作業の継続 	<p>課題：フェーシング工事により、雨水が排水路等に多く流れ込む</p> <ul style="list-style-type: none"> →新設排水路の設置 ・北側ルートは2016年4月27日に通水を開始、南側ルートは2016年6月20日に通水を開始
方針3 漏らさない	水ガラスによる地盤改良	<ul style="list-style-type: none"> 2014年3月に地盤改良完了 水ガラス上部に地表面までの地表処理を完了 (2015年3月31日完了) 	<ul style="list-style-type: none"> 港湾内モニタリングの継続 ウェルポイントからのくみ上げの継続 	<p>リスク：ウェルポイントからのくみ上げ不調により汚染した地下水が地盤改良壁を乗り越え港湾内へ流出</p> <ul style="list-style-type: none"> →海側遮水壁の閉合と地下水ドレンの稼働を実施 →地下水位の適切な監視を継続
	海側遮水壁の設置	<ul style="list-style-type: none"> サブドレンが安定的に浄化・移送できることを確認し、海側遮水壁を2015年10月26日に閉合完了 海側遮水壁の鋼管矢板の頭 (杭頭) の結合、遮水壁内側の舗装面の補修を実施 	<ul style="list-style-type: none"> 杭頭結合状況及び舗装面の点検、必要に応じて補修 	<p>課題：地下水位上昇に伴う鋼管矢板のたわみの増加、遮水壁内側部舗装面の一部ひび割れ</p> <ul style="list-style-type: none"> →たわみの大きさの定期的な確認 →評価により、遮水壁の健全性を確認済 →舗装面の点検の継続、必要に応じて補修
	タンクの増設 (溶接型へのリプレイス等)	<ul style="list-style-type: none"> 2015年3月末に80万トン整備完了 引き続きタンクの建設・リプレースを実施 (2018年4月末時点で約114万トンの容量を確保) 	<ul style="list-style-type: none"> 溶接型タンクの建設、フランジ型タンクの解体 タンク内の残水処理 	<p>リスク：解体作業によるガストの飛散</p> <ul style="list-style-type: none"> →ガスト飛散抑制対策の実施、ガストの監視 <p>課題：新設タンクの設置遅れ、タンク容量の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> →適切な工事監理・工程管理・タンク運用 <p>課題：トリチウムの扱いについては、国のトリチウム水タスクフォースにて基礎情報が整理された</p> <p>現在、国の多核種除去設備等処理水の取扱いに関する小委員会にて議論が行われており、その動きを踏まえ対応</p>